「行政」「人」「地域の魅力・価値」を「プラス」でつなぐ情報誌

Noto PLUS

広報のと No. 107
2014.1.1

1

日本海の恵み「のと寒ぶり」
県漁協能都支所にずらり並ぶ見事なブリ。1月19日には冬の味覚満載の「のと寒ぶりまつり」も開催されます。

広報のと　第107号
平成26年1月1日発行

■発行：能登町　■編集：広報情報推進課
〒927-0492
石川県鳳珠郡能登町字宇出津新1字197番地1
☎：0768-62-1000(代)
能登町 URL：http://www.town.noto.lg.jp
E-メール：info@town.noto.lg.jp

千尋の浜草 ちひろのはまぐさ

旅日記① 先祖・吉彦に会いたくて

【写真左】加藤家の霊舎（先祖の霊位などをまつる場所）にある位牌（いはい）。本居宣長の遺言書にあるとおりの文字が記載されている。
【写真上】「千尋の浜草」表紙（町指定文化財・民俗資料館蔵）
【写真下】現在の酒垂神社（宇出津）

「千尋の浜草」は、酒垂神社十二代宮司であった加藤吉彦（かとうえひこ、よしひことも読む）が寛政年間、伊勢松坂の本居宣長の鈴屋入門を目的とした道中を記したもので、和歌も添えた旅日記です。（能登町指定文化財）

加藤吉彦が、国学の大家本居宣長の鈴屋に入門したのは「寛政九年（1797）丁巳」のこと。かつて宇出津を訪れた伊勢の御師北御門益孝の導きにより、向学心に溢れる吉彦が伊勢松坂の宣長の門をたたいた。宣長68、吉彦36の歳でした。吉彦は12歳の時に父（加藤輝彦）を亡くしていて、母の手で育てられました。22歳で当社の神職の相続、従五位下叙任（上野介）をはたし神社の祭祀を司る一方で、既に宣長との出会いの以前（25歳くらい）から、著作や写本をはじめています。極めて高い向学心と泉のごとく溢れるばかりの意欲を備えた人物像が浮かんできます。鈴屋入門を目的とした吉彦の旅日程は、5月8日から21日にわたる松坂までの2週間の道行と、宣長に対面する6月2日までの12日間、そして帰郷までの70余日間、伊勢松阪や山田での生活や風景を吉彦自身の手で綴られています。

◇

酒垂神社宮司の加藤三千雄さんが、9代前のご先祖、加藤吉彦の足跡を実際にたどります。江戸時代の能登の文化人の活動を知るとともに、意外なエピソードも満載。どうぞご覧ください。

「広報のと」1月号の印刷費は一部当たり27円です。